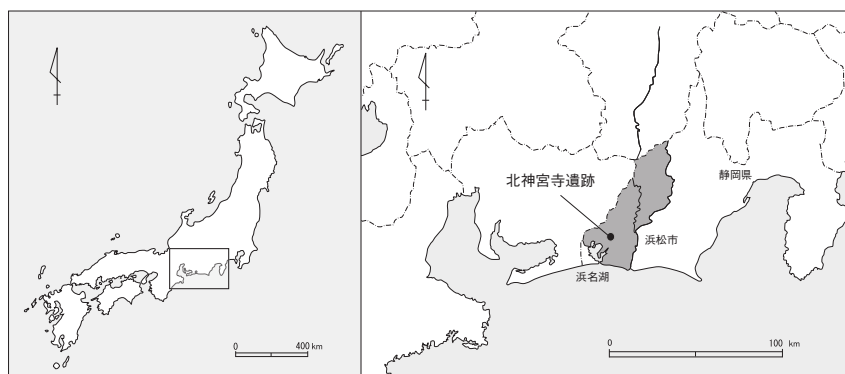


北神宮寺遺跡 2 次

2011



(財) 浜松市文化振興財団

例言

1. 本書は、静岡県浜松市北区引佐町地内（井伊谷街区1号公園）における北神宮寺遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、井伊谷街区1号公園の整備工事に先立ち実施した。詳細については、下記の通りである。
3. 発掘調査
現地調査 2010年8月24日～2010年9月2日
整理報告 2010年9月3日～2011年3月10日
(契約日2010年7月15日)
4. 調査体制
調査委託者 浜松市（市長 鈴木康友）主管課 公園緑地部公園課
調査受託者 財団法人 浜松市文化振興財団（理事長 伊藤修二）
調査指導機関 浜松市教育委員会（浜松市生活文化部文化財課が補助執行）
調査担当者 仲川美津保・大野勝美（文化財課）
5. 発掘面積 361㎡
6. 本書の執筆・編集は大野勝美が担当した。
7. 調査に係る費用は、全額浜松市が負担した。
8. 調査に係る諸記録および出土遺物は、浜松市文化財課が保管している。

凡 例

1. 挿図の方位は、真北である。
2. 標高は、海拔を示す。
3. 本書の座標値は、世界測地系に準拠する。
4. 遺構の略記号は下記の通り。 SB：竪穴住居跡 SD：溝 SK：土坑 SP：小穴

目 次

第1章 調査の経緯と経過	1
第2章 調査の成果	6
第3章 まとめ	16
写真図版	18

第1章 調査の経緯と経過

位置と環境 北神宮寺遺跡は、静岡県浜松市北区引佐町の井伊谷盆地の河岸段丘上に位置し、西側と南側を浜名湖に注ぐ都田川の一支流である神宮寺川に囲まれている。日当たりがよくかつ眺望がきき、住環境としては最良の場所である。井伊谷盆地は、山間地域への入口にあたる小さな盆地にすぎないが、古代から中世にかけて歴史の表舞台に華々しく登場している。古墳時代は、静岡県で最古級の北岡大塚古墳や馬場平古墳などの大型古墳が造られており、相当有力な豪族が居住していたと推定されている。また南北朝時代には、この地は南朝方の東海地方における一大拠点となり、宗良親王を擁して三岳城およびその支城で激しい攻防戦が行われた。そして江戸時代には、名門の譜代大名である井伊氏の本貫地として、井伊氏ゆかりの寺院等が栄えた。

調査の経緯 1999年、引佐町井伊谷土地区画整理組合（2005年に浜松市井伊谷土地区画整理組合に名称変更）が設立され、大規模な土地造成が計画された。造成予定地には周知の埋蔵文化財包蔵地である北神宮寺遺跡が含まれていたことから、土地区画整理事業に先立ち、2003年と2004年に引佐町教育委員会が、2005年～2007年に浜松市教育委員会の指導のもと(財)浜松市文化振興財団が発掘調査（現地調査）を実施した。これを第1次調査と呼ぶ。

2010年、同事業の一環として、浜松市公園緑地部公園課によって、井伊谷街区1号公園の整備工事が行われることになった。そこで工事に先立ち、遺跡が損なわれる部分に限り、発掘調査を実施することになった。これが今回の第2次発掘調査である。

調査の経過

〔現地作業は下記の通りに推移した〕

- ・ 8月24日（火）－晴れ－
コンテナハウス事務所とトイレの設置。重機により1トレンチの北半と2トレンチの北半を表土除去。作業員により遺構の検出と掘削。
- ・ 8月25日（水）－晴れ－
重機により3トレンチ、4トレンチの表土除去。作業員により遺構の検出と掘削。1トレンチ北半の遺構の写真撮影。
- ・ 8月26日（木）－晴れ－
作業員により遺構の検出と掘削。3トレンチと4トレンチの遺構の写真撮影。
- ・ 8月27日（金）－晴れ－
作業員により遺構の検出と掘削。2トレンチ北半の遺構の写真撮影。トータル・ステーションで遺構実測。
- ・ 8月28日（土）－晴れ－
現地調査休止。仮置の掘削土を南側から北側へ移動（重機と2トンダンプ）。
- ・ 8月30日（月）－晴れ－
2トレンチ南半、1トレンチ南半の表土除去。

・8月31日（火）－晴れ－

5トレンチの表土除去。遺構実測。

・9月1日（水）－晴れ－

現場作業員の最終日。写真撮影。

・9月3日（金）－晴れ－

トイレとコンテナハウス事務所の撤去。

〔整理作業は、2010年9月6日～2011年3月10日に、浜松市埋蔵文化財調査事務所（神原町）において、土器の洗浄、乾燥、注記、接合、復元、実測、撮影、および図面の編集、清書、また原稿執筆、校正等を実施した〕

※発掘調査参加者 （現地調査）伊藤清、戸田正美

（整理作業）伊熊むつ子、加藤由美子、熊谷洋子、島田智佳子、林至美、水島絵理、森下朋子

弥生後期～古墳前期の様相（第1図参照）弥生時代後期から古墳時代前期にかけて、都田川下流地域は非常に重要な役割を担っていたと推測する。西から伝播してきた弥生文化や古墳文化が、不安定な浜名湖今切口や天竜川河口のデルタ地帯を避けて、浜名湖北岸を廻り、静岡県に入って最初に定着したのがこの地域であった。そして更に重要度を増す要因は、この地域が近畿地方の文化圏の東限であり、天竜川の東岸に広がる異文化圏への入口に位置していたからである。それは出土遺物からも認められる。天竜川を境にして土器様式が大きく異なり、また銅鐸を初めとする各種青銅器の分布域も原則的にそれぞれが天竜川を越えていない。

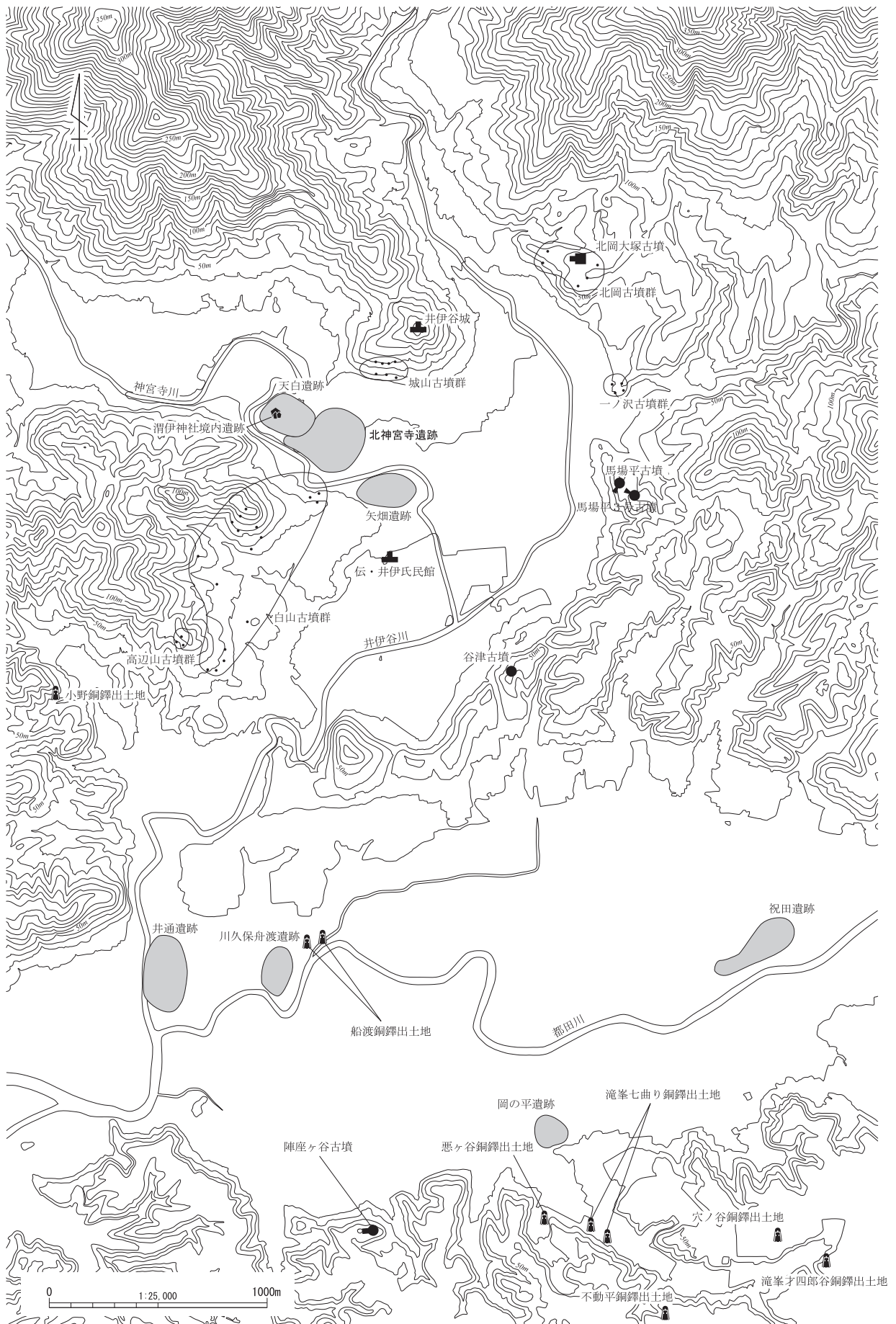
その都田川下流地域において、興味深いひとつの傾向が認められる。それは銅鐸の分布域と前・中期大型古墳の分布域が明瞭に二分されている点である。これについて簡単に触れておきたい。

銅鐸は、都田川平野から、出土が確実なものが10個発見されている。その他に出土した可能性のあるものが2個ある。内訳は下記の通り。前者には、滝峯の谷（通称：銅鐸の谷）から出土した悪ヶ谷銅鐸、滝峯七曲り1号銅鐸、滝峯七曲り2号銅鐸、不動平銅鐸、穴ノ谷銅鐸、滝峯才四郎谷銅鐸の6鐸と、他に船渡1号銅鐸、船渡2号銅鐸、小野銅鐸、前原銅鐸がある。後者には、埋め戻されたコツサガヤ銅鐸と古戦場から出たと言われている三方原銅鐸がある。これほど多くの出土地が密集している地域は他にはなく、弥生時代後期に銅鐸祭祀が熱心に執り行われていた証拠である。

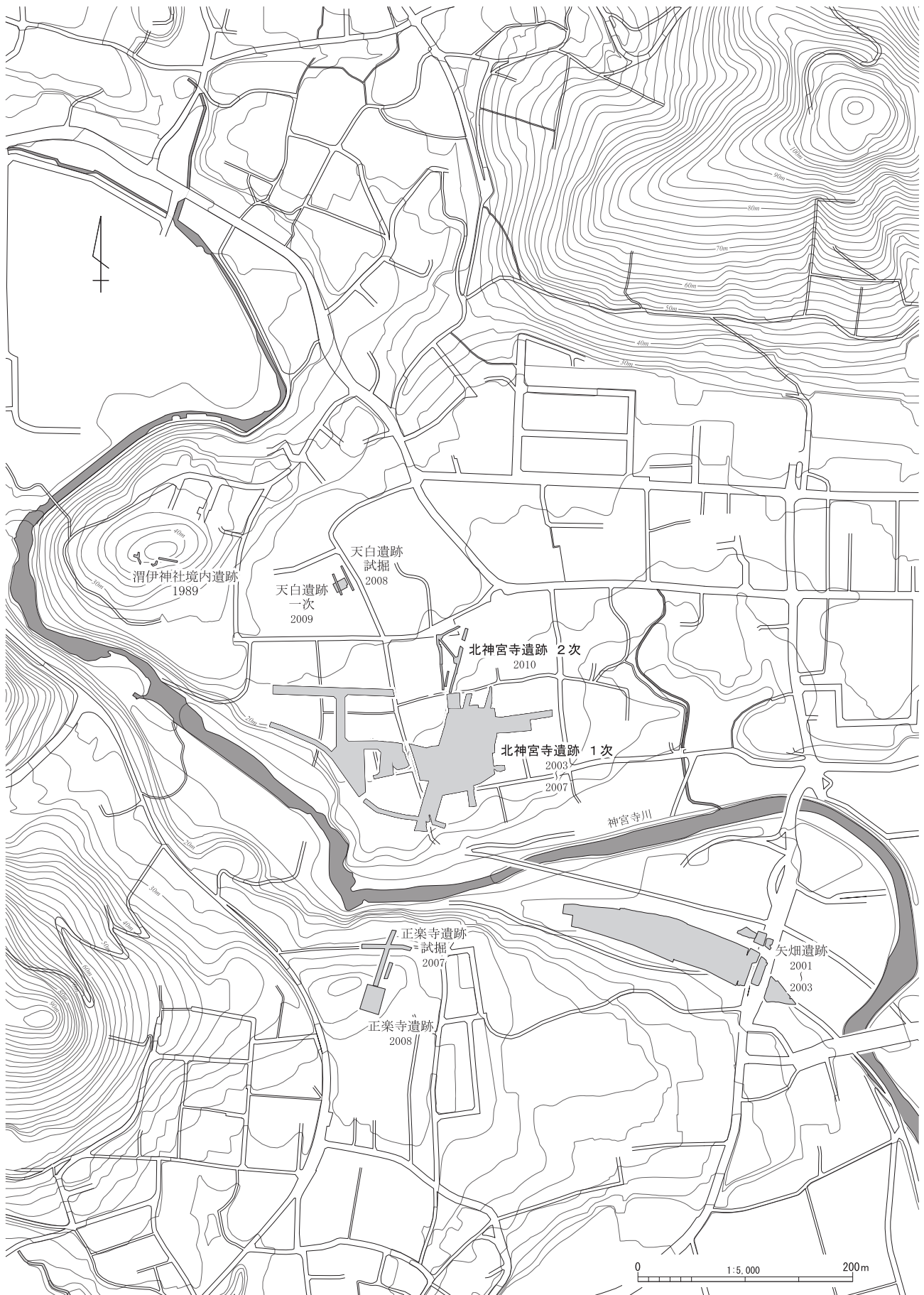
古墳は、井伊谷盆地の東側尾根上に、北から前期中葉～後葉の北岡大塚古墳、前期後葉～中期初頭の馬場平古墳、馬場平3号古墳、谷津古墳と前・中期の大型古墳が並んでいる。

問題は、銅鐸はすべて都田川平野にあり井伊谷盆地には見られない点、それとは逆に前・中期の大型古墳はほとんどが井伊谷盆地にあり都田川平野は非常に少ない点である。この傾向の解明こそが弥生後期～古墳前期のこの地域の様相を知る上で大きな鍵となると思われる。その点からみて、井伊谷盆地にある古墳時代前期集落である北神宮寺遺跡が徐々に明らかになっている意味は大きい。

周辺の調査歴 北神宮寺遺跡では、2003年と2004年に引佐町教育委員会によって、2005年～2007年に浜松市によって、第1次発掘調査が行われた。この調査で古墳時代を中心とした集落と墓域が検出されている。そして2010年に、今回の第2次発掘調査が行われた。天白遺跡では、1989年に同



第1図 都田川下流域の遺跡



第2図 周辺遺跡の発掘調査歴

志社大学と引佐町教育委員会によって渭伊神社境内遺跡の発掘調査が行われ、古墳時代から奈良時代にかけての磐座祭祀遺構が発見されている。また別の場所で2008年に浜松市によって試掘調査が行われ、2009年に同所の本調査（第1次）が行われた。複数の方形周溝墓が発見されている。正楽寺遺跡では、2007年に浜松市によって試掘調査が行われ、2008年に同所の本調査が行われた。縄文時代の遺構と遺物が出土している。矢畑遺跡では、2001年～2003年に静岡県によって発掘調査が行われ、古墳時代の祭祀土坑や方形周溝墓が発見されている。

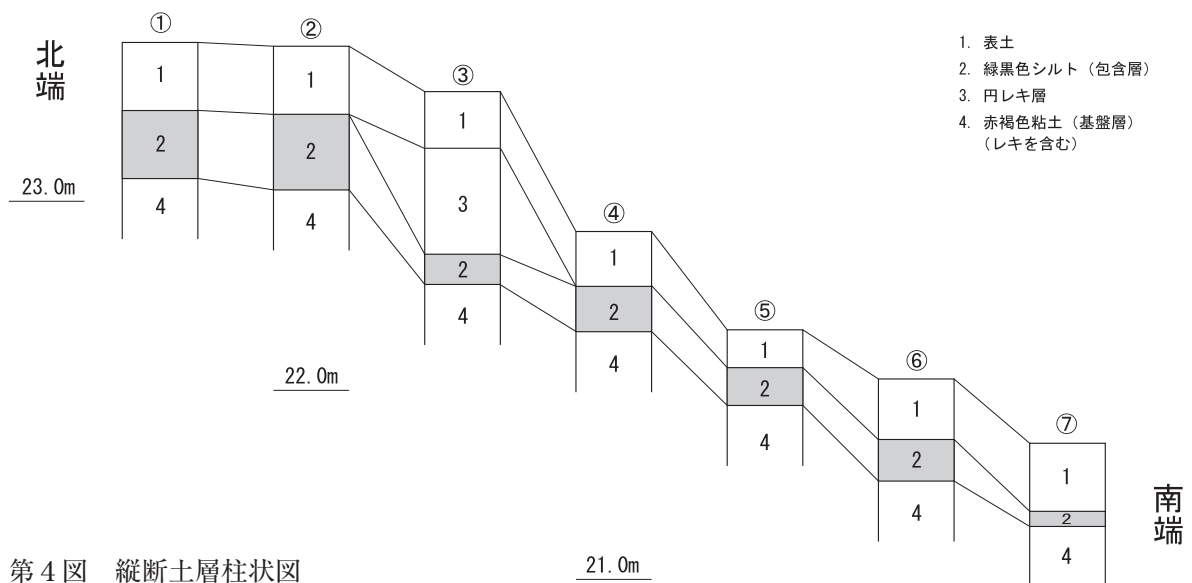


第3図 北神宮寺遺跡と区画整理計画図

第2章 調査の成果

1. 基本層位

土層は単純な水平堆積である。上から順に第1層、第2層、第4層と堆積し、第3層は部分的に存在する。第1層は表土層（埋立て土）であり、一部に旧耕作土が見られる。第2層は緑黒色シルト層で、古墳時代から戦国時代までの土器片を含んでいる。第3層は、コブシ大から人頭大の礫を多く含む礫層である。調査地中央の傾斜地を中心に分布していることから、川によって運ばれてきたものと推測する。第4層は赤褐色粘土の基盤層である。場所によっては、赤褐色粘土の中にコブシ大の礫が大量に含まれている。



第4図 縦断土層柱状図

2. 概要

1 トレンチは南北方向のトレンチで、北端で古墳時代前期の竪穴住居跡（SB01）を検出した。その他に小穴（SP03）、溝（SD03）、土坑（SK02）を検出した。

2 トレンチは南北方向に伸びるトレンチで、2北トレンチと2南トレンチに分かれる。2南トレンチの中央で古墳時代前期の竪穴住居跡（SB02、SB03）を2軒検出した。

3 トレンチは東西方向に伸びるトレンチで、中央で古墳時代前期の竪穴住居跡（SB04）、東端で同時期の溝（SD05）を検出した。

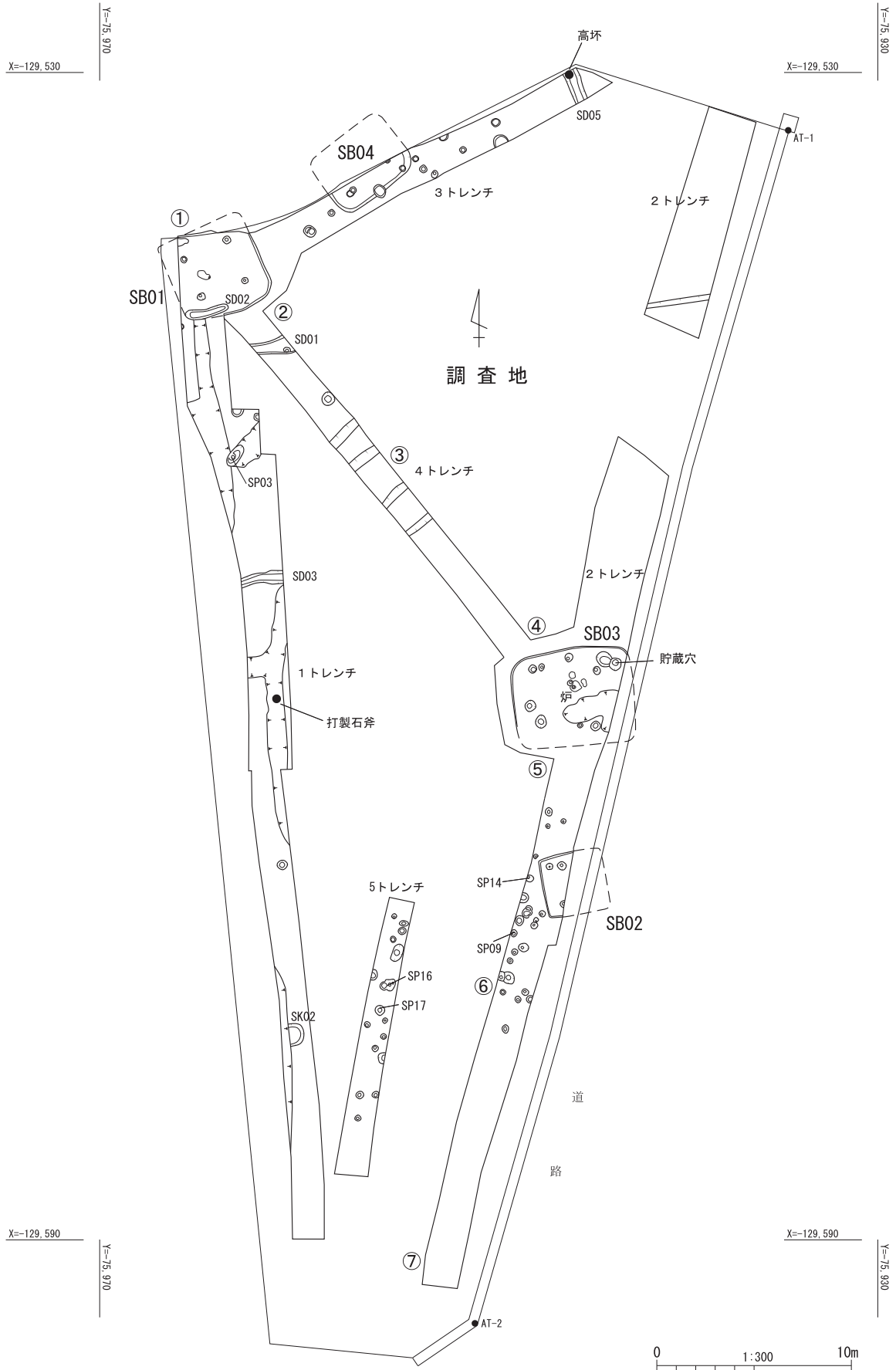
4 トレンチは中央部を斜めに横断するトレンチで、北側で溝（SD01）を検出した。

5 トレンチは南北方向に伸びるトレンチで、戦国時代前後の掘立柱建物の柱穴と推定する小穴群と土坑を多数検出した。一部に古墳時代前期の遺構が含まれる。

3. 遺構と遺物

（1）縄文時代（第6図）

縄文時代の明確な遺構は検出できなかった。遺物としては、1のスクレイパーと2の打製石斧

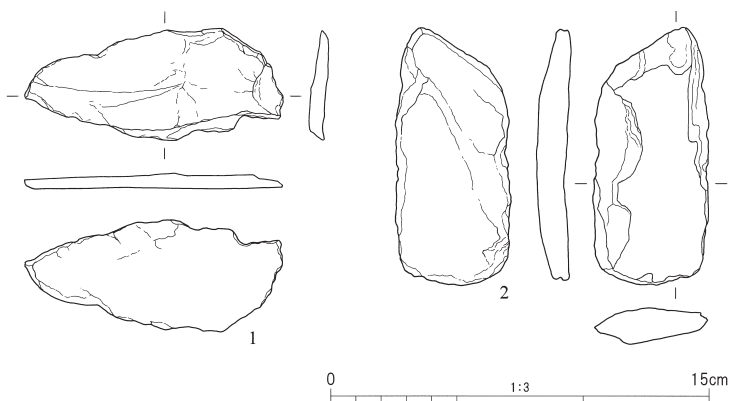


第5図 第2次調査全体図

の各1点が出土している。

1のスクレイパーは、2トレンチの中央にある竪穴住居（SB03）を精査中に出土したものであるが、おそらく竪穴住居が造られた時代もしくはそれ以後に混入したものとする。

2の短冊型の打製石斧は、1トレンチの中央にある近代～現代の地境溝から出土したものであり、明らかに混入品である。



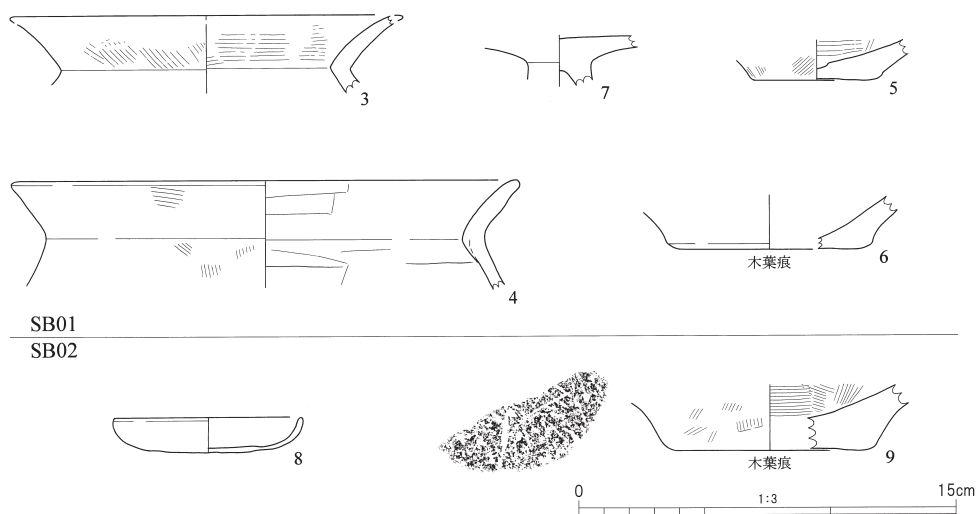
第6図 縄文時代の出土遺物

（2）古墳時代

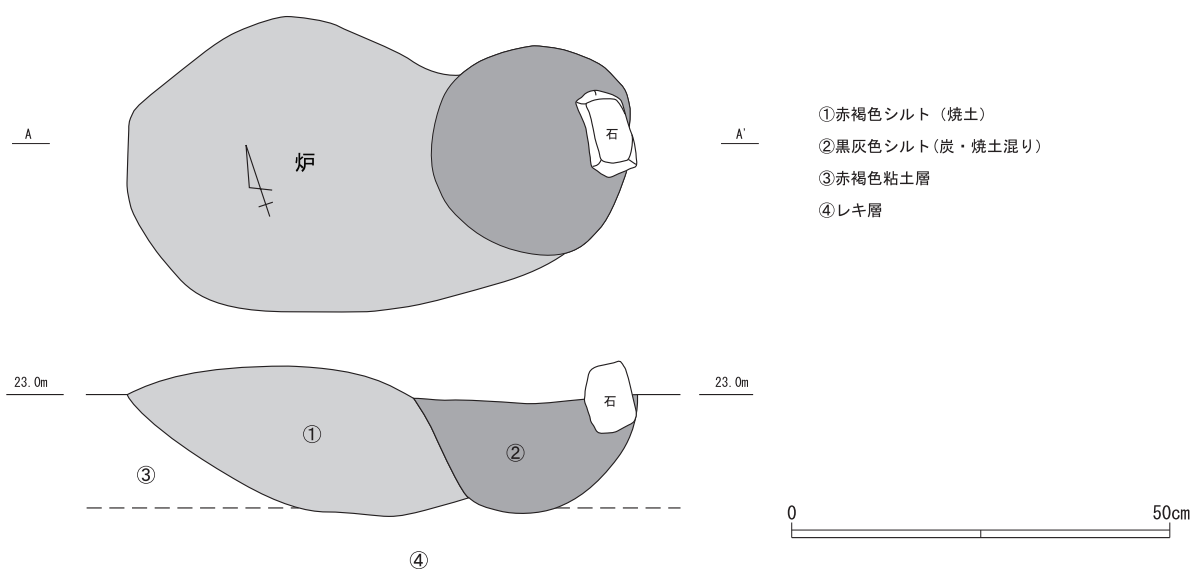
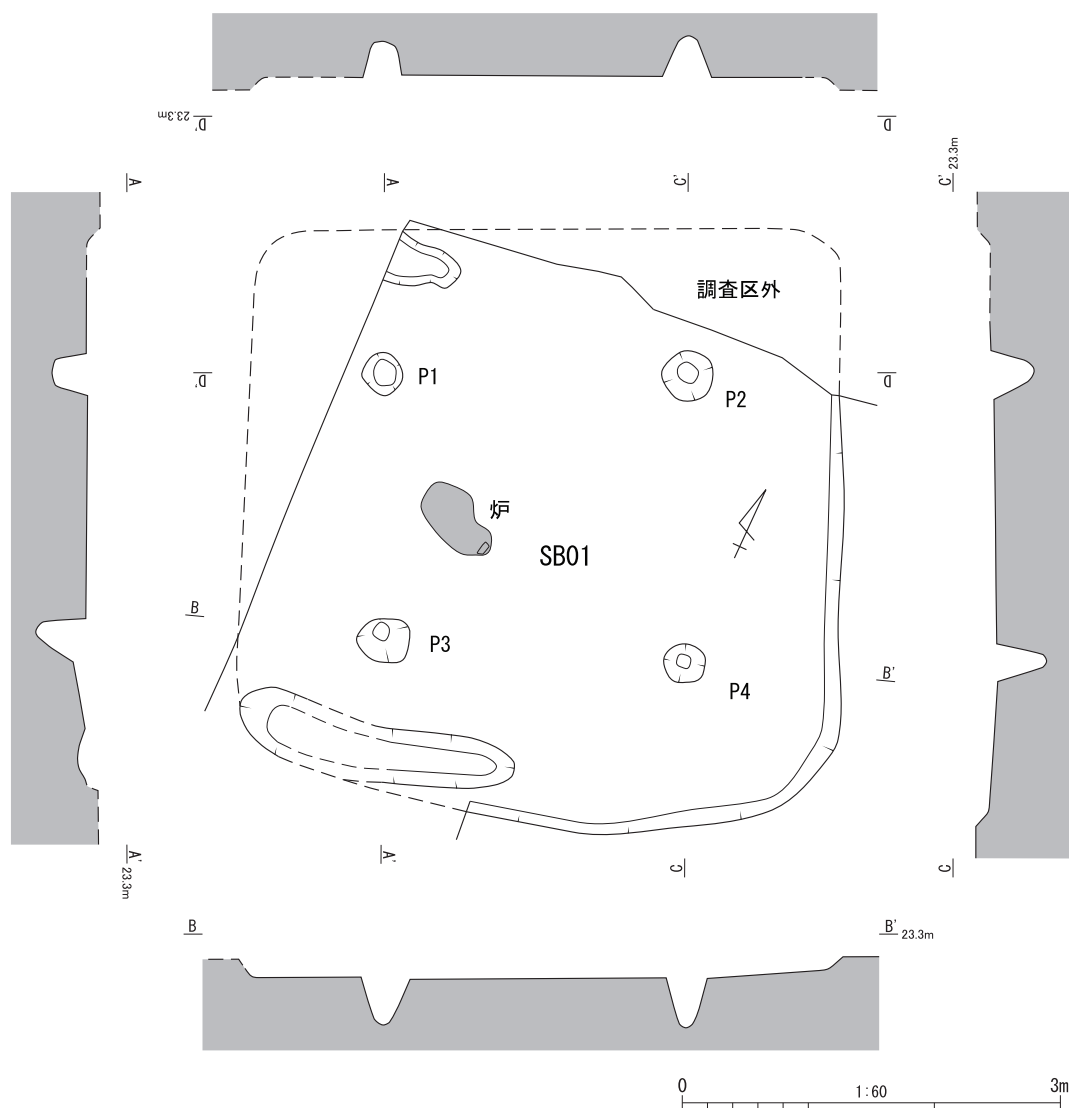
竪穴住居（SB01） 1トレンチ、3トレンチ、4トレンチの交点にある竪穴住居で、全体の約80%を検出した。住居の規模は約4.8m×4.8mで、平面形は隅丸方形と推定される。中心からやや西側に寄った位置で炉跡を検出したが、貼床および周壁溝は検出できなかった。柱穴は、深い掘方をもつ小穴を4基（P1～P4）検出した。炉跡の横には、横長の角石が置かれていた。やや石の長さが短い、北神宮寺遺跡第1次調査で検出された置石炉と同じものとする。

SB01出土土器（第7図） 住居内から土器が比較的多く出土したが、図化できたものは次の5点だけであった。3は広口壺の口縁部、4は台坏甕の上部、5と6は壺の底部、7は高坏の接合部である。これらの土器の廃棄年代は、小破片であるために絶対の確信をもてないが、古墳時代前期とみてよからう。したがって竪穴住居（SB01）は古墳時代前期に使用されていた。

竪穴住居（SB02） 2トレンチの中央にある竪穴住居で、全体の約30%を検出した。住居の規模は推定3.2m×3.3mで、平面形は方形もしくは長方形と推定される。住居の角が隅丸形ではないのは、残存状態が悪かったために見誤った可能性もある。柱穴は、やや位置が不自然であるが、P1とP2が対応すると考える。貼床、炉跡、周壁溝などの痕跡はまったく検出できなかった。



第7図 SB01・SB02 出土土器



第8図 SB01 遺構図

SB02出土土器（第7図） 竪穴住居（SB02）から出土した土器は少なく、図化できたのは8と9だけであった。8はかわらけであり、後世の混入品と思われる。9は壺の底部であり、底の裏面に木葉痕が見られる。時期は古墳時代前期で問題ないと思う。

竪穴住居（SB03） 2トレンチの中央部にある竪穴住居で、全体の約80%を検出した。住居の規模は推定5.1m×6.2mで、平面形は隅丸方形と見られる。

検出当初から、この住居は2軒が重複しているように見えた。炉跡が3ヶ所、貯蔵穴が2基あること、柱穴らしき小穴が多いことからみて、建て替えが行われた可能性が非常に高い。しかし何度も精査したが、重複しているという確信は持てなかった。したがって、

第10図は確実な遺構ラインだけを図化したものである。

炉跡は、中央付近に確実なものが1基あり、その横の2ヶ所に焼土が認められた。2ヶ所の焼土は薄いもので、小穴も伴わないことから、炉跡である可能性がある以上のことは言えない。

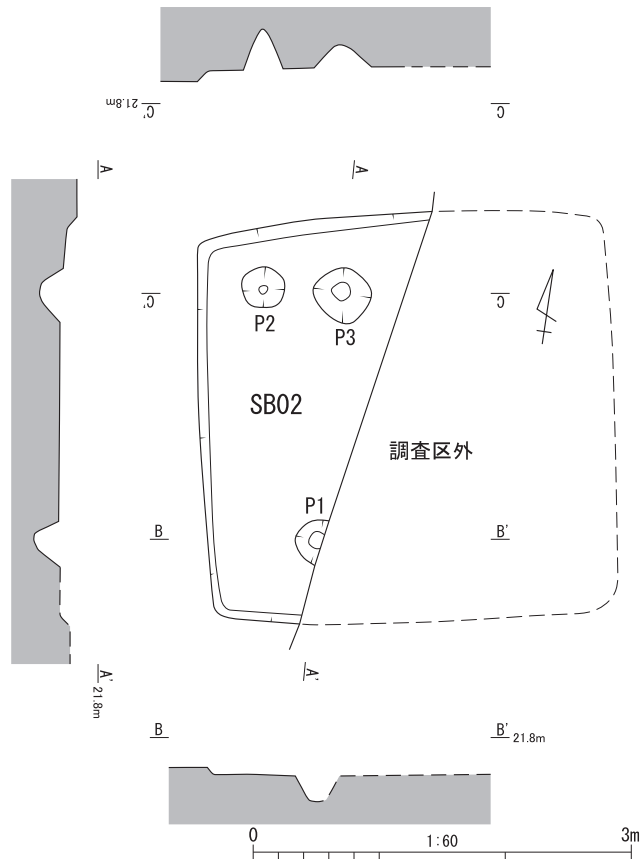
柱穴は、やや不自然な位置関係になるが、P1～P4の4基が対応すると考える。ただしP4が浅く位置がズレていることから、本来の柱穴は攪乱坑によって潰されたのかもしれない。

貯蔵穴は、北東隅で2基検出した。西側がやや大きく浅い貯蔵穴で、東側が深い貯蔵穴であった。両者から土器が多く出土した。

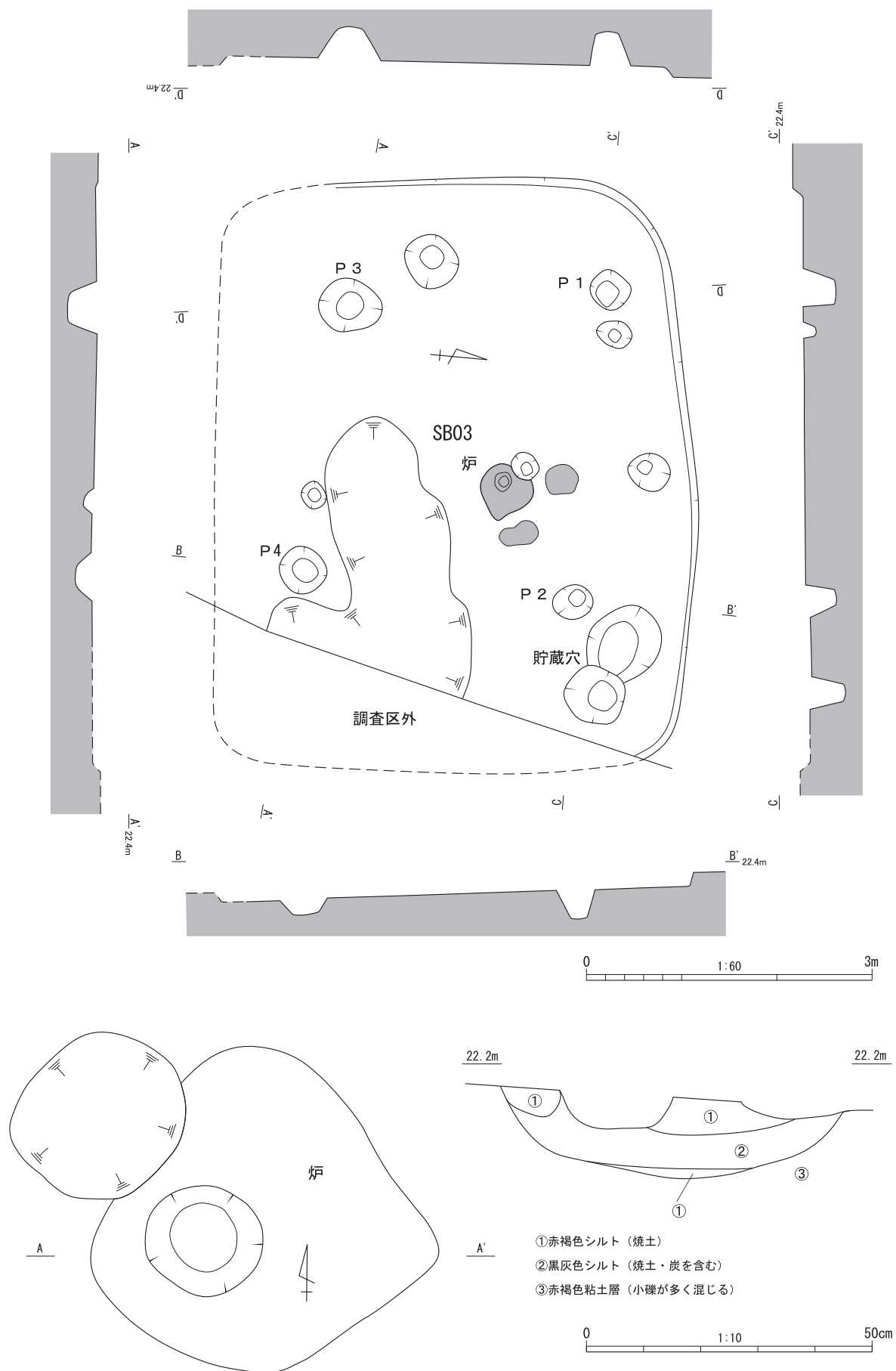
周壁溝は検出できなかった。これまでの神宮寺遺跡の調査成果からみて、最初から無い可能性が高い。

SB03出土土器 竪穴住居（SB03）の床面と推定する面と貯蔵穴およびその周辺から多くの土器が出土した。しかし須恵器は一片も出土していない。また今回の調査区全体をみても、須恵器はまったく出土していない。

10～15（第11図）は竪穴住居（SB03）の貯蔵穴から出土した土器で、その内の10と11が東側の



第9図 SB02 遺構図



深い貯蔵穴に入っていたもの、12～15が西側の浅い貯蔵穴に入っていたものである。16～25（第12図）は竪穴住居（SB03）内から出土したものである。

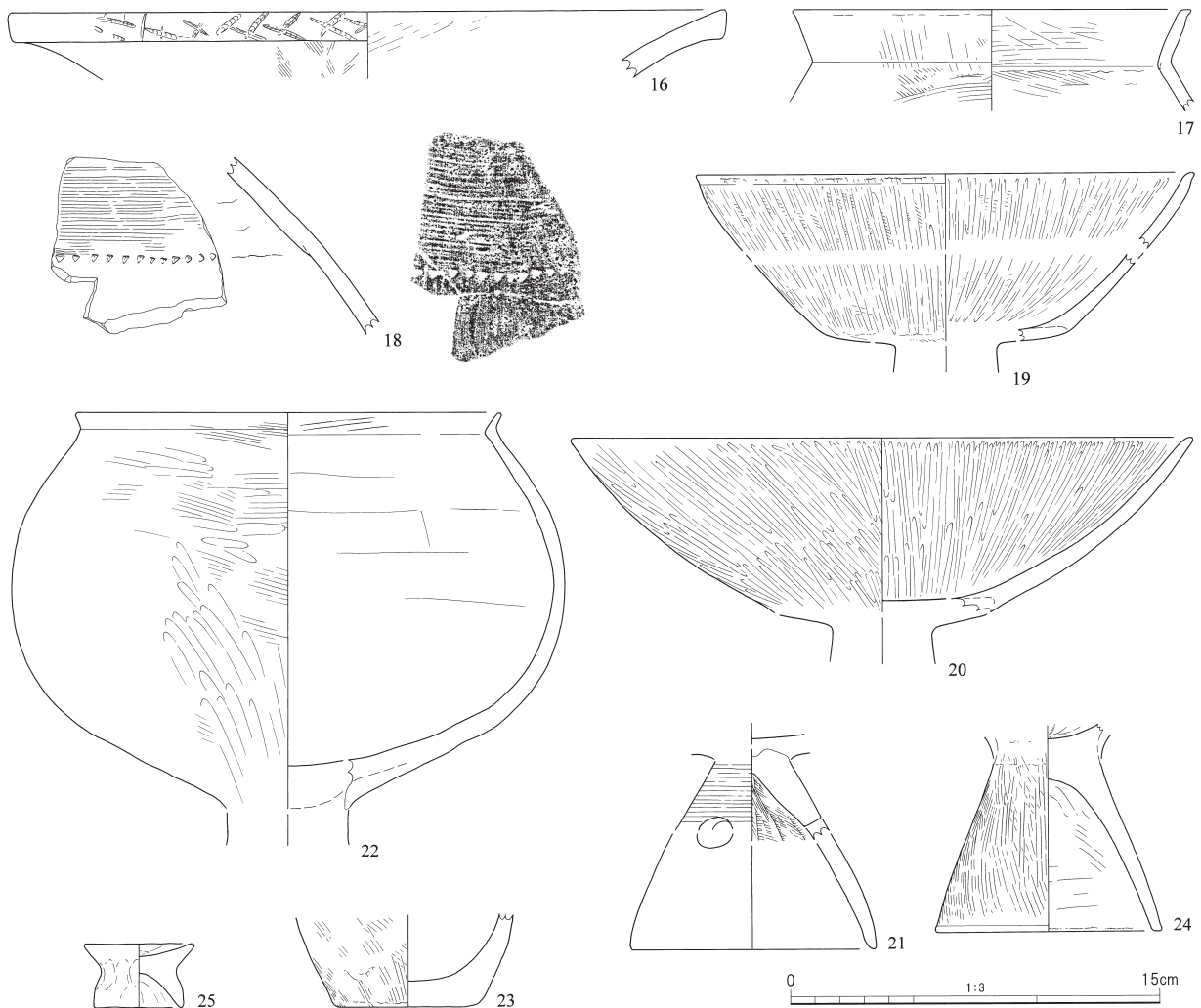
10は台付甕であるが、台部が欠損している。これは東側の貯蔵穴にそのままの状態が入っていた。



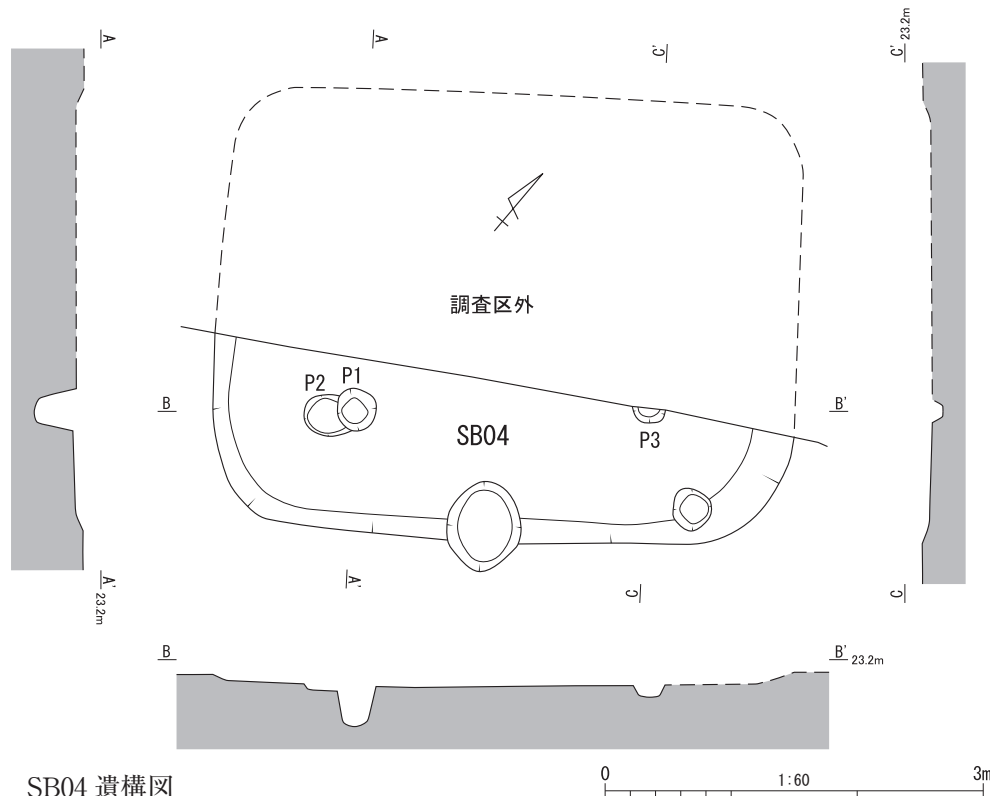
第11図 SB03貯蔵穴出土土器

11は小型高坏で、脚部が欠損している。坏部の内面と外面に細かな縦方向のヘラミガキが認められる。12は埴であり、外面に細かな縦方向のヘラミガキが認められる。13は小型の台付甕であり、外面が非常にマメツしている。14は大型の台付甕であり、口唇部が尖頭形につくられ、角に刻み目を持たない。15は台付甕の台部であり、脚端がやや内湾している。16は広口壺の口縁部で、口唇に櫛状工具で刺突して斜格子紋を施している。17はくの字状に屈曲する口唇部をもつ鉢もしくは台付甕と思われる。18は広口壺の肩部の破片で、櫛描横線文と刺突横線文が施されている。19は高坏の坏部で、下方に稜をもつ。内外面に縦方向の細かなヘラミガキが認められ、口唇部が強くヨコナデされている。20は高坏の坏部で、下方に稜をもつと思われる。内外面に縦方向の細かなヘラミガキが認められる。21は高坏の接合部で、細かな櫛描横線文と3方向の円形スカシが認められる。22は脚付鉢と推測され、外面に横方向および斜め方向のヘラミガキが認められる。内面は板ナデされている。23は壺または鉢の底部と思われる。24は台付甕の台部である。25は高坏形の手捏土器で、祭祀に使われたものである。

以上の土器の年代であるが、古墳時代前期とみて矛盾するものはない。



第12図 SB03 出土土器



第13図 SB04 遺構図

竪穴住居（SB04） 3トレンチの中央にある竪穴住居で、全体の約30%を検出した。残存状態は悪かった。住居の規模は推定3.5m×4.6mで、平面形は隅丸方形と推定される。貼床と周壁溝は検出されなかった。また炉跡は調査区外にあるために検出できなかった。柱穴は、4基の内の2基を発見したが、P1とP3が対になるのか、それともP2とP3が対になるのか、不明であった。住居が建て替えられた可能性がある。

土器は少し出土したが、小破片のために図化できるものはなかった。住居の時期であるが、土器および住居の平面形から、古墳時代前期と推定する。

溝（SD01） 4トレンチ北半にある溝で、少量の土器が出土したが、図化できるものはなかった。時期は覆土および土師器片から、古墳時代前期と推定する。

溝（SD02） 1トレンチ北半の竪穴住居（SB01）内にある。SB01の壁と平行していることから、周壁溝の一部である可能性がある。いずれにしてもSB01に関係ある遺構であろう。土器は26（第14図）の小型鉢の上胴部が出土している。

溝（SD05） 3トレンチの東端で検出した溝である。土器は溝の北端で31の高坏が出土した（出土位置を第5図に黒丸で示す）。坏部の下方に稜をもち、脚部が直線状に開く、古墳時代前期の高坏である。SD05が機能していた時期も古墳時代前期であろう。

小穴（SP03） 1トレンチの北半にある、攪乱溝の中に残された円形の小穴である。比較的によくの土器片が出土したが、図化できたものは27～29だけである。27はやや内湾する口縁部をもつ広口壺で、28と29は壺もしくは鉢の底部と思われる。時期は27の内湾する口縁部から、古墳時代前期であろう。

小穴（SP17） 5トレンチの中央にある円形の小穴である。32～34が出土した。32は広口壺の内湾する口縁部であり、33は2重口縁壺の頸部から口縁部にかけての破片である。34は直線状に開く口縁部をもつ埴である。これらの時期は古墳時代前期である。

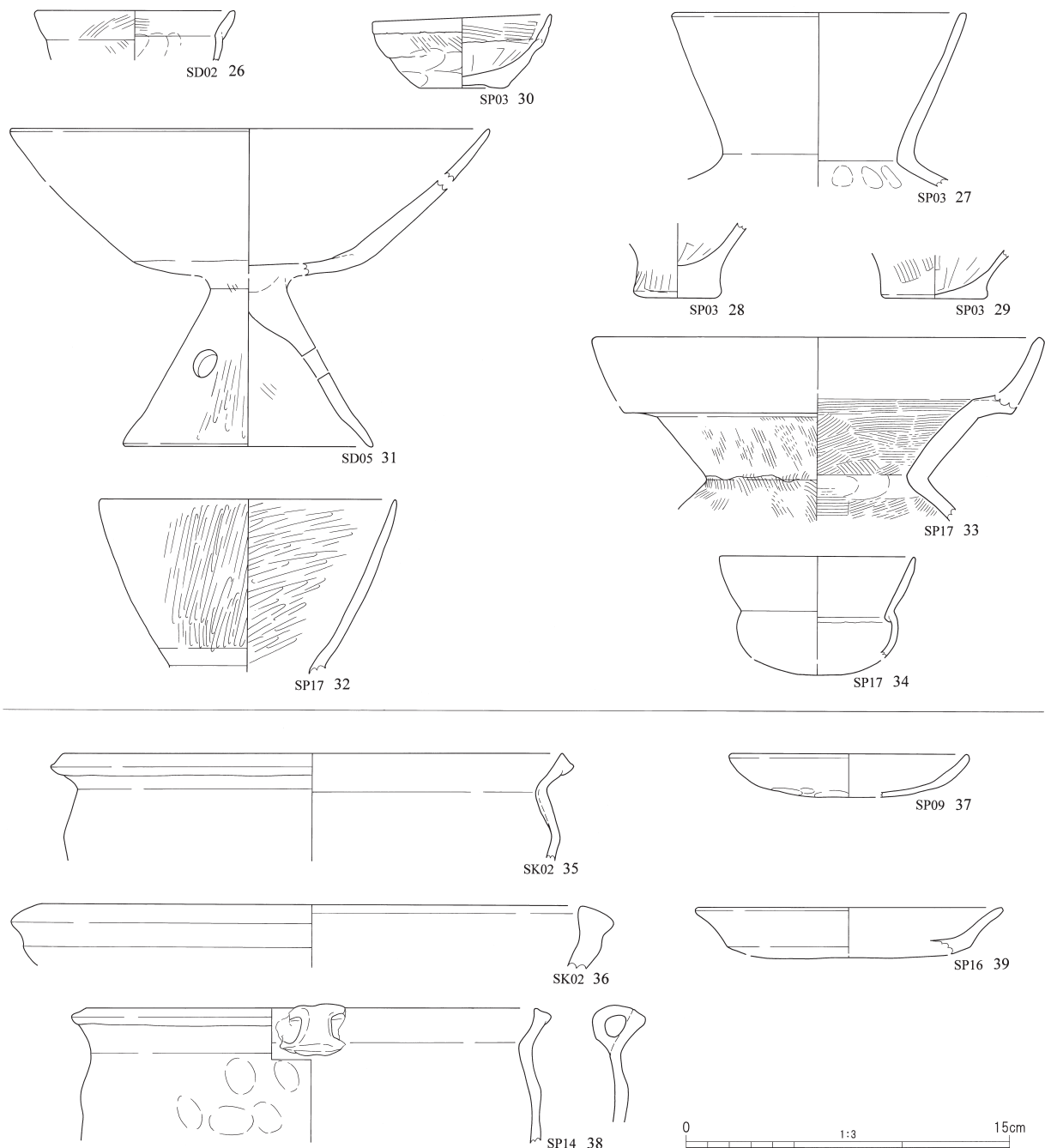
(3) 戦国時代 (第14図)

土坑 (SK02) 1 トレンチの南半にある土坑で、35の内耳鍋の上胴部が出土した。

小穴 (SP09) 2 南トレンチの中央部、SB02の南西に位置する円形の小穴である。37のかわらけが出土した

小穴 (SP14) 2 南トレンチの中央部、SB02の西に位置する円形の小穴である。38の戦国時代の内耳鍋の上胴部が出土した。

小穴 (SP16) 5 トレンチの中央にあるやや大きい不整形の穴で、39 (第14図) を含む少量の土器が出土した。39は山茶碗の小皿で、時期は13世紀頃であろう。



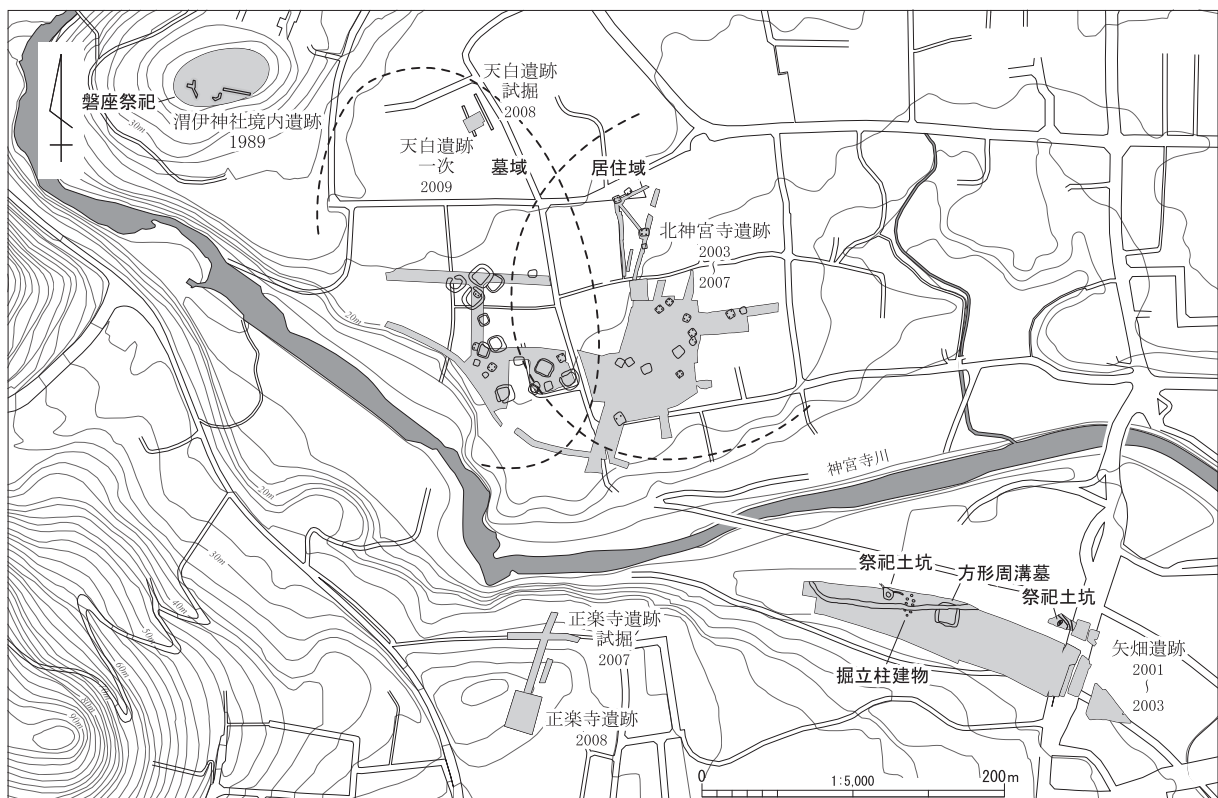
第14図 SD・SK・SP 出土土器

第3章 まとめ

集落と墓域 今回の北神宮寺遺跡第2次調査の成果や周辺遺跡の発掘調査および試掘調査等によって、北神宮寺遺跡周辺の様相が徐々に明らかになってきている。特に古墳時代前期については注目すべき点が多くあることから、当時の景観を簡単に復元してみようと思う。

第15図に示したように、集落は段丘上東側の相当広い範囲に広がっていたと推定される。集落内の建物は大部分が竪穴住居であり、掘立柱建物がほとんど存在しないという、やや特異な様相を示している。最初から存在しないのか、それとも周辺に集中地区があるのか、今後の検討課題である。ただ浜北区東原遺跡でも同様の様相を示していることからみて、この地域の特色である可能性もある。そして集落の西側には、一部を重複して方形周溝墓を主体とする広い墓域が北西方向に広がっている。弥生時代の慣習を守り、古墳時代前期になっても営々として方形周溝墓を造り続けてきたが、この時期に少し変化が起こった。近畿地方と密接な関係をもち、大きな権力を握った一部の首長が山上に巨大な古墳（北岡大塚古墳、馬場平古墳）を造り始めたのである。現状では、その首長が居住していた最有力候補地として、北神宮寺遺跡の大集落があげられる。

集落の南側を神宮寺川が東流し、その先に広がる平野に水田があったはずである。そして注目すべきは、平野部へ水が流れ込む入り口に位置する矢畑遺跡である。この矢畑遺跡で、古墳時代前期に水辺の祭りが執り行われたと思われる遺構が発見されている。そしてその水辺の祭りは古墳時代中期になると、集落西側の渭伊神社境内遺跡へ移動し、磐座祭祀に変化した可能性がある。



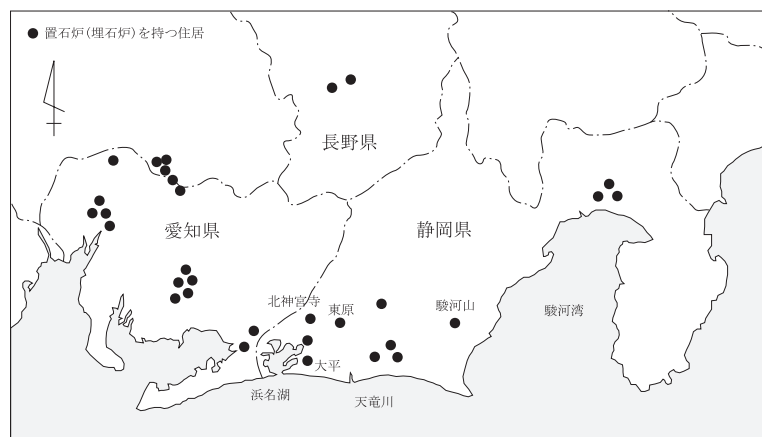
第15図 古墳時代前期における様相

水辺の祭祀 矢畑遺跡発掘調査（2008 静文研）の担当者の一人であった者として、いくつか補足しておきたい点がある。矢畑遺跡では、大量の土器を伴った土坑を2基（SK01、SK02）検出した。SK01は調査区西側で検出した大きさ約7×8mのすり鉢状の大型土坑で、大量の古墳時代前期の土器と共に庄内型甕が出土した。そして土坑には、西側に流入口があり、その反対の東側に排水溝があった。常時水が流れ込んでいたとみられ、流入口の直下に深みができており、深みの底および周辺に完形品に近い土器が散在していた。SK02は調査区北東端にあった小川のすぐ横で検出した浅い大型土坑で、大量の古墳時代前期の土器と共に手焙型土器が出土した。手焙型土器や庄内型甕からみて、近畿の中央政権との強いつながりが伺える。この矢畑遺跡において、近畿地方の影響を強く受けた水辺の祭りが執り行われたのではなかろうか。他にも近畿地方との広域的な交流を伺わせるものが発見されている。SK01とSK02の中間で古墳時代前期の方形周溝墓が検出されているが、そこから近畿地方と関係深い鉄剣と圭頭形鉄鏃が出土している。

もう1点補足しておきたい。SK01に接した東側で、時期不明の大型掘立柱建物を検出した（『矢畑遺跡2008』写真図版PH.5-2参照）。深く大きな長方形掘方をもつ1間×3間の掘立柱建物で、もしかしたら棟持ち柱をもつ可能性もある。遺物がまったくないために時期不明の建物であるが、その建物の方向と位置関係が非常に興味深い。

置石炉をもつ住居 今回調査のSB01は置石炉をもつ住居であった可能性が非常に高い。また過去に行われた北神宮寺遺跡1次調査でも、古墳時代前期のSB20、SB22、SB30、SB38、SB51で置石炉が発見されている。静岡県西部地区では、弥生中期末（例：井通遺跡）～古墳時代前期（例：大平遺跡）の置石炉をもつ住居が多く発見されていることから、この地区特有の形態であると思われる。

しかし第16図に示したように、周辺地域にも置石炉をもつ住居が点在しており、特に愛知県の鹿乗川流域に置石炉又は埋石炉^{（注1）}をもつ住居が集中している。これらのことから、置石炉をもつ住居は静岡県特有のものではなく、東海地方全域にみられる弥生中期～古墳時代前期の住居形態と考える。



第16図 置石炉をもつ住居分布図（石黒立人 2009 を一部修正）

注1 置石炉と埋石炉を識別することは、発掘精度とも関わり、非常に難しいと考える。そこで本稿では、両者を同類とみなし、すべてを置石炉として集成した。

参考文献 石黒立人 2009 「凹線紋系土器期前後の伊勢湾岸域」『中部の弥生時代研究』中部の弥生時代研究刊行委員会
引佐町教育委員会 1992 『天白磐座遺跡』 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008 『矢畑遺跡』
(財)浜松市文化振興財団 2009 『北神宮寺遺跡』

写真図版 1



1 トレンチ (北から)



3 トレンチ (西から)



2 トレンチ (北から)



5 トレンチ (北から)

写真図版2



SB01（北から）



SB02（東から）



SB03（東から）

写真図版 3



SB04 (東から)

出土遺物 1



写真図版 4 出土遺物 2



報告書抄録

書名		北神宮寺遺跡（きたじんぐうじいせき） 2次				
副書名						
巻次						
シリーズ名・番号						
編著者名		大野勝美				
編集機関		浜松市教育委員会 〒430-0929 浜松市中区中央1-2-1 イーステージ浜松オフィス棟 浜松市生活文化部文化財課 (浜松市教育委員会の補助執行機関) 〒430-0946 浜松市中区元城町103-2 053(457)2466				
発行機関		財団法人 浜松市文化振興財団 〒430-7790 浜松市中区板屋町111-1				
発行年月日		2011年3月10日		発掘面積		361㎡
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° / "	東経 ° / "	発掘期間
		市町村	遺跡番号			
きたじんぐうじいせき 北神宮寺遺跡	しずおかけんはままつし 静岡県浜松市 きたくいなさちょう 北区引佐町	22202	5-04-20	34° 49′ 59″	137° 40′ 2″	2010年 8月24日～ 9月2日
発掘原因		記録保存調査				
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		
北神宮寺遺跡		縄文時代		打製石斧、スクレイパー		
	集落	古墳時代	竪穴住居跡4軒、 土坑、小穴、溝	古式土師器		
	集落	戦国時代	土坑、小穴	内耳鍋、かわらけ		

北神宮寺遺跡2次
2011年3月10日発行

編集機関 浜松市教育委員会
発行機関 財団法人 浜松市文化振興財団
印刷 中部印刷株式会社